

ダイテス領攻防記 2

登場人物紹介

ゲイン

「強欲王」と呼ばれる
東の国
カイナンの王。

トゥール

「無敗王」と呼ばれる
西の国
エチルの王。

水谷美有

腐女子人生を謳歌していたOL。
事故で命を落とし、
ミリアーナとして転生。

セイ

「早風」と呼ばれる
凄腕の密偵。

マティサ

オウミ王国の元王太子。
廃嫡されて、ダイテスに
婚養子としてやって来た。
「黒の魔将軍」と
恐れられている。

トウザ

「ハヤサの鬼」と
呼ばれる
南の国ハヤサの
王太子。

ジュリアス

オウミ王国王太子で、
マティサの実弟。

コシス

マティサの忠実な臣下。
家督を弟に譲り、
主について
ダイテスまで来た。

クラリサ

ミリアーナの侍女。
BL好きの
貴腐人でもある。

ミリアーナ

辺境の地ダイテス領の公爵令嬢。
BLをこよなく愛している。
快適な暮らしと萌えを求め、
オーバーテクノロジーで
異世界を改革中。

プロローグ 風を捕える

『殺してくれ』

その男は声を出さずに、そう訴えた。

『呪式じゆしきを入れられた。自ら死のうとすると、体が動かなくなる。舌すら嘸かめん。できるなら、殺してくれ』

それは、密偵がよく使用する会話方法だった。声を出さずに、互いの唇の形を読み合うのだ。殺してくれと訴えている男は、密偵であった。特徴のまったくない顔をしている。

男は密命おひめいを帯びてここ——オウミ王国のダイテス領セタの城に潜入せんに入したが、罠にかかって捕えられた。情報を吐かされる前に自害しようとしたものの、呪式が発動して果たせず、生きながらえってしまった。

呪式とは魔法のひとつだ。ダイテスでは捕えた密偵のすべてに、魔術師が呪式を入れる。発動者が特定の呪符を使用した場合、対象が自害しようとした場合、対象がオウミから出ようとした場合に発動する。全身の力が抜けて動けなくなるのだ。

自害に失敗したその密偵はなぜか他の虜囚りよしゆうとは区別され、塔の一室に閉じ込められた。それから

半年以上が経っている。

男の置かれた状況が、天井裏に潜ひそむ男——祖国の密偵の耳に、なんらかの形で入ったのだろう。

昼間だというのに城へ忍び込み、様子をうかがいにきた。なんとも豪胆ごうたんな男だ。

捕えられた密偵は、これ幸いと自分の始末を頼んだ。その思い切りのよさに、相手のほうがためらったほどである。

天井裏に潜む年若い密偵は、呪式の説明を聞いて考え込んだ。ひとまず捕えられた男を連れてダイテスを抜け出し、オウミ国内で情報の受け渡しができないだろうか。

『オウミ国内では発動しないなら、隣の領地の根城ねじょうで——』

若い密偵がそこまで口にした時、部屋の扉が勢いよく開いた。

「曲者まがもの！」

城の兵士たちが飛び込んでくる。

「ちいっ！」

その部屋に捕えられていた男は、引つつかんだ掛け布で兵士の顔を打った。そして兵が怯ひるんだ隙に、天井板が外されてわずかにできた空間に跳び上がる。

「通路は？」

見事な跳躍とつりを見せた男が尋ねると、潜んでいた男が慌てて答えた。

「こ、ここを真っ直ぐだ」

その言葉を聞くやいなや、捕えられていた男は年若い男を抱えて走り出した。人を抱えた不自

然な体勢だというのに、恐ろしく速い。時折、抱えている男に侵入経路を確認し、その逆をたどり、建物を出て庭を突っ切った。

警備の兵士たちが逃げる男を追いかけますが、彼はその速さを活かして攻撃もすべてかわす。そして人を抱えたまま、自身の身長の三倍ほどもある城壁を軽々と飛び越えた。尋常な脚力ではない。城壁を飛び越えた時、男は視界の端に、ある人物の姿をとらえた。なぜ気づいたのかは男にもわからなかったが——物見の塔で、ふわふわの金髪の男が晒っていた。それを目にした瞬間、背筋がぞっとした。

（手の内かよ！ ど変態が！）

そう都合よく、侵入した密偵が男の部屋にたどり着けるわけがない。誘導されたのだ。「城内に特別な虜囚がいる」という噂を流せば、噂の真偽を確かめるために組織は動くだろう。それに合わせて、あえて城内の罠を外しておく。

まんまと嵌められたわけだ。

とはいえ、それがわかっていても、男は組織の者を見殺しにすることができなかった。
（滅びろ！ 変態！）

そう心の中で毒つきながら、男は追っ手を振り切ったあとも速度を緩めず、走り続けた。

オウミ王国の北の辺境、ダイテス公爵領。

そのセタの街にある城より、一人の囚人が逃走した。

ダイテス領の防衛を担当しているアドアルド・アムール長官は、慌てず騒がず、かねてよりの計画を実行に移した。

それから一夜が明けた。



大陸の中央にあるオウミ王国の北は、ダイテス公爵家の領地である。その広大な土地は、竜骨と呼ばれる高い山脈に三方を囲まれている。南以外に出入り口のないダイテス領は、長らく辺境であつた。

しかし、オウミの王太子マティサが廃嫡され、ダイテスに婿養子としてやってきた。これにより、現在は注目を集めているのだが——ダイテス領の情報は、なぜか外に出てこない。

公爵家の成り立ち、当主の名前、マティサの妻となった一人娘の名前くらいは簡単に調べられる。また、産品には国内で稀少な塩が含まれ、驚くほど豊かな土地であることもすぐにわかる。しかし、それ以外の情報は知られていない。まるで意図的に隠されているかのよう。

自動車はのどかな道をひたすら突っ走っていた。

オウミの王都からダイテス領へ行くには、他の領主が治めるいくつかの土地を通らなければならぬ。

街道の整備は、その道が走る土地を治めている領主の役割である。直轄領の場合は、国が整備するが、それ以外の土地の街道整備は、領地の豊かさや領主の性格に大きく左右される。

王都からダイテスへ向かう道は——周囲が辺境であることも関係し、多くがほったらかしにされている。そもそもこの世界の道は、徒歩の人々や騎馬、せいぜい馬車や荷車が通ることを前提としている。自動車という未知の存在が走ることなど想定していない。

でこぼこ道であろうとぬかるみであろうと、四輪駆動の自動車はそれらを乗り越えてひた走る。運転席に座るミリアーナは、後方を確認した。

「今のところ、追っ手の姿はなしね」

その言葉に、ミリアーナの忠実な侍女であるクラリサが苦笑する。

「お嬢様、さすがに騎馬では追いつけませんわ」

「それはそうだけど……とにかく、ダイテスまで逃げ切れればいいわ。ダイテスに入っちゃえば、たとえ軍隊をけしかけられても、蹴散らしてみせるから」

自動車は、この世界にはないものだ。騎馬や馬車では、とても追いつけない。

なぜそんなものがあるのかといえば、ダイテス公爵家の一人娘ミリアーナが作らせたからだ。

ミリアーナには、『前世の記憶』というものがある。

ミリアーナは前世で、この世界とは別の世界——異世界で暮らしていた。

日本という国に生まれ、事故により若くして命を落とした。前世での名は、水谷美有。少しばかり歴史好きな腐女子で、普通のOLだった。

その記憶を持つミリアーナからすると、ここは中世ヨーロッパ風の世界で、前の世界に比べれば文明が数百年遅れている。

とにかく暮らしにくいのだ。

そこでミリアーナは、前の世界の文明をダイテスで再現した。この世界にあるはずのないもの——オーバーテクノロジーである。

そのひとつが自動車だ。動力に精霊石を利用していため魔法道具としているが、その内部構造は異世界の知識の産物なのだ。

この世界には、魔力があふれている。人里離れた場所には魔力が凝り、なんらかの現象を引き起こす。人知の及ばないその不可思議な現象は、精霊によるものとされていた。また、魔力は石に宿ることもあり、精霊と同じ現象をもたらす。たとえば、「火」の属性を持つ魔力が宿った石は、熱を発し続ける。人々は、そのような石を精霊石と名づけた。

さらに、魔力は人にも宿る。魔力を持つ人間は、『加護持ち』と呼ばれている。ミリアーナの婿、マテイサも『加護持ち』だ。

ミリアーナは、魔法を前の世界の技術に組み込もうと考えた。その結果、あちらの技術とこちらの魔法のハイブリッドが誕生した。

おかげでダイテスは独自の発展を遂げた。だが、この世界にはまだ未熟な人間が多いため、これらの技術を流出させるのは危険である。そこでミリアーナは、ダイテスが辺境なのをいいことに、これらの技術を秘匿していた。

今回、それを領外に持ち出したのは夫のためだ。

その夫、マティサは後部座席で真っ青になっている。助手席に座っているクラリサの運転に比べれば、ミリアーナの運転の方が相当マシではある。しかし、車に乗りなれていないマティサにとって、時速百キロでの走行はかなりきつい。マティサの隣に座る、彼の腹心コススも同様だ。

後部座席で青い顔をしていたマティサは、オウミ軍が追ってきたら蹴散らすと言ったミリアーナに向かって、弱々しく声をかけた。

「やめる……本気でオウミ軍が壊滅するからやめる」

ミリアーナは、ルームミラー越しにマティサを見やる。

「婿様」

「追っ手は……さすがにかけんだろう……かければ……俺を処罰しなければ……ならなくなる」

東の国カイナンとの小競り合いを終わらせたマティサは、論功行賞を蹴飛ばし、王都を抜け出した。

これは、オウミ王の顔に泥を塗る行為である。もし王が追っ手をかけた場合、マティサ一行を捕えた時になんらかの処分を下さねば、まわりが納得しないだろう。しかし処罰が本意ではない王は、マティサたちを見逃して不問とするしかない。

それがわかっているからこそ、一行は王都を逃げ出したのだ。

そもそも、王太子であったマティサがなぜミリアーナの婿になったのかといえば、マティサの実母である王妃リサーナが、言いがかりとしか思えない理由で彼を廃嫡に追い込んだからである。

その後、マティサは辺境の地ダイテスに追いやられた。そして同母弟のジュリアスが王太子となつた。

リサーナは、一連の騒動の手助けをした貴族たちへの報酬のひとつとして、彼らが西の大国エチルへ侵攻するのを後押しした。

しかし、その無謀な計画は『無敗王』トゥールに叩きつぶされ、オウミは大敗。一万を超える死者を出したオウミの西側領主は力を失い、王妃の権力は地に落ちた。

エチル侵攻の際に担ぎ出された新王太子ジュリアスも、他国から『恐るるに足らず』と判断されたことだろう。事実、東の大国カイナンは、オウミにちょっかいをかけてきた。

それを蹴散らしたのがマティサとあれば、オウミ国内でマティサの王太子復権を望む声が上がってしまう。弟ジュリアスと仲が悪いわけではないマティサは、それを回避したいらしい。

ミリアーナとしても、マティサに協力するしかない。もし王太子復権が実現すれば、マティサとミリアーナは離縁させられるだろう。ミリアーナは、マティサと離婚したいわけではないのだ。

マティサのか細い声に、ミリアーナは首をかしげて尋ねた。

「大丈夫ですか？」

マティサが恨めしげな視線を送る。

「大丈夫に見えるか？」

「全然」

ミリアーナは首を横に振った。

次の瞬間、タイヤが大きな石でも踏んだのか、車が大きく跳ねた。マティサの喉がぐっと鳴る。

「よ、嫁……」

「しゃべらない方がいいですよ。道が悪いので、舌を噛みます」

可哀想だが、今のミリアーナには何もできなかった。

「もう少し我慢してくださいね、婿様。すぐにダイテスに入りますから」

そう言っ、ミリアーナはアクセルを踏み込む。

通常五日はかかる王都からダイテスまでの距離を、車は数時間で走り抜けた。



セタ城に帰り着いたマティサ一行に、エドアルド・アムールからの伝言が伝えられた。報告したことがあるらしい。

「エドアルドが？」

マティサが首をかしげる。

エドアルド・アムールは、領防衛軍の長を務めている。その彼からの報告ということは、ダイテスにとって重要な話なのだろう。

「あ、たぶん、頼んでおいた諜報員の話だと思うわ」

事もなげにそう言ったミリアーナに、マティサは眉を寄せた。

「……？」

今までダイテスには、影の組織——いわゆる密偵と呼ばれる者たちがいなかった。そのため、他国の情報を掴むのが難しい。

また王都と距離も離れているので、情報を手でできたとしても、その伝達までに時間がかかる。

オウミのエチル侵攻については、なんとか和睦が実現しておさまた。しかし、西国エチルとの戦いで戦力の衰えたオウミを、他国が見逃すはずもない。その後、東の大国カイナンによるオウミ侵攻は防いだが、一度の敗北で『強欲王』ゲインが諦めるわけがない。必ずや、また仕掛けてくるだろう。

それに、王妃派の領主たちが馬鹿なことをしでかさないと限らない。

マティサは、王太子という身分に対して少しの未練もなかった。それはもう、清々しいほどに。むしろ、ダイテスという魔境を治めることこそ自分の義務だという、固い決意がある。

しかし、他の人間たちは、マティサのそんな決意を知る由もなかった。

そして皮肉なことに、『戦神の寵児』とまで謳われたマティサの名声が悪魔をする。廃嫡により一臣下に落とされて、マティサが大人しくしているはずもない、復権を目指しているに決まっている——そんな勝手な判断をする人間が大勢いる。

それが悪意であれ善意であれ、マティサには迷惑なだけだった。

いったん王都から離れ、一時の熱狂が醒めるのを待つしかないものの、他国と国内を見張る目と

耳が必要なのは明らかだ。

ダイテスに帰還した一行がまず気にしなければならないのは、諸国の動向である。しかし、渦中の人であるマティサには、国内外から監視がついているはずだ。そのため直接動くことはできず、マティサの腹心コシスが集めた、付き合のある領主たちからの情報を頼りにするしかない。

とはいえ、それだけでは情報が足りず、また時間もかかりすぎる。

「自前の組織は、どうしても必要よね？ いつまでもコシスにばかり頼れないわ」

ミリアーナは胸を張って言った。小柄で童顔ではあるが、ミリアーナは政治に対してなかなかの見解を持っている。

情報は、正確さと早さが命だ。刻々と変わる情勢を把握しようにも、又聞きの情報だけでは対処できない。

ミリアーナはそれを見越して、マティサの不在時に諜報に関わる組織を作ったのだ。

マティサは感心して言った。

「確かに、今までのように、見捨てられた辺境ではいられたらうからな。まったく、お前はできた嫁だよ」

長身の元王太子は、美しい顔に不敵な笑みを浮かべた。

「わかった。エドアルドに、すぐ会おう」

第一章 影集う

マティサは着替えを済ますと、執務室でエドアルドと面会した。

黒髪に黒い瞳を持つマティサは、深い藍や黒といった色を好む。引き締まった長身に濃い色合いの衣装をまとうと、一種の威圧感があるらしい。他国の兵たちが、『黒の魔将軍』と恐れるほどだ。その威圧感は交渉の際に有利に働くことも多い。そのため、マティサは普段から許される限り、自身の好みの衣装を着用している。

執務室には、当然のようにミリアーナとコシスがいた。二人とも、マティサにとっては大事な助言者だ。

「お喜びください。以前からの懸案事項でありました諜報部の人材ですが、確保できました」
「ここにこの笑顔で、エドアルドはマティサに報告した。」

「それは半年以上前に捕えた、あの密偵か？」
マティサが婿入りして最初に捕まった密偵を、エドアルドは取り込んでみせると言い引き取った名前を付け、裏でいろいろとしているらしいが、マティサは詳細を知らなかった。もともと、知りたくもないが。

「いえ、あの子とは別口です。あの子は現在、こっちの思惑どおりに行動中です。細工は万全です

ので、もうじき結果が出ると思います。」

小柄で少女のような顔をした長官は、えへへと可愛らしく笑う。しかし、騙されてはいけない。ふわふわの金髪を揺らすエドアルドは、変態だった。

両刀がめずらしくないこの世界では、男色家であったとしても、差別されることはない。ただ、エドアルドはそれに加えて、加虐趣味の持ち主であった。

腹の中で、何を考えているものか。

「今回、召し抱えましたのは、主を持たずに仕事を引き受けていた、いわゆる流しの密偵ですよ。細作、暗殺もこなす人です。裏の世界では知る人ぞ知る人でして、諜報部の教官役も任せようと思つてます。さつそく、お会いしますか？」

密偵の仕事は、情報を収集したり、内情を探ったりすることである。それに対して細作は、破壊工作や戦闘をこなす荒事の専門家だ。その両方ができるといふのは、かなり有能な人物なのだろう。「会おう」

マティサがそう言うのと、すぐさま別室に控えていた男が呼ばれた。

年の頃は、三十前後だろうか。背が高く、引き締まった体つきをしている。髪と瞳は、黒色。端正な面差しからは、知性がうかがえる。整えられた口ひげが、渋さを醸し出していた。

ただ、男の頬には赤みが差しており——ぶっちゃけ酒臭かった。

「お初にお目にかかります。『黒の魔将軍』マティサ殿。お噂はかねがね耳にしておりました。お会いできるとは恭悦しごく。カズル・ツナガと申します。『亡国』と冠をつけて呼ばれることも

ありますが、これは単に、小生の生国が滅びただけのこと。祖国をなくし、汚れ仕事を引き受けて生き延びておりました、塵芥に過ぎませぬ。このような取るに足らぬ身を捨てただけで、光栄でございますな。くだらぬ小生などに何を期待しておられるかはわかりませぬが、身を粉にして働きますよう」

カズルの挨拶は、その内容に反して口調が投げやりだった。

どういうわけだか、グレている。

マティサは眉を寄せて、エドアルドに視線を向けた。エドアルドは肩をすくめる。

「いやあ、なんか矜持をへし折っちゃったみたいで。捕まった人たち、皆こんなふうになるんですよ。ほぼ無傷で捕まったこととか、ダイテス特製『素直になるお薬』がよく効いてなんでも快くしゃべっちゃったこととか……そういうのが、もつのすごく自尊心を傷つけるみたいで。抜け殻みたいになる人、続出です」

カズルは、吐き捨てるように「ケツ」と言った。

マティサは、エドアルドの言葉に頷く。

「ああ、なるほど」

捕えられても仕方がないほど傷を負っているならともかく、無傷で虜囚となるなど耐えがたいことだ。武人のマティサがそう考えるのだから、密偵たちはさらに苦痛を感じるだろう。捕まった際、自害するような者たちである。まして情報を漏らしたとなれば、抜け殻になるのも当然だ。

ダイテスの玄関口とも言われる街、セタの領主城。セタはダイテスで唯一外に接しており、初代

領主は、あえてこの街に居城を配置した。外敵に襲われた時、何がなんでもここで食い止めるという気概が感じられる。それを体现するように、城は堅牢なつくりになっている。そんな城にミリアーナが改造を加え、居住性を向上させるとともに、防衛力も強化した。特に「曲者ホイホイ」と命名された罫は、多くの侵入者を捕えている。

東のカイナン、西のエチル、南のハヤサ、西南の中堅国ランカナ、カイナンの属国ナグモ……。どういいうわけか周辺国だけではなく、オウミの密偵までもセタの城で捕えられている。

捕えられた密偵は、ダイテスにしかない「素直になるお薬」を使われて尋問される。この薬は、やたらと効くらしい。

「最初に捕えた、あの密偵にも薬を使っているのか？」

「いえ、あの子にはもう少し手間をかけてます」

マティサとエドアルドのそんなやり取りに、カズルが反応した。

「それは、最初に面通しさせられた者のことかね？」

カズルの黒い瞳には、鋭い光が宿っている。

「そうだよ」

エドアルドは、にこにこしながら答えた。

この防衛長官は、最初に捕えた密偵をいたく気に入っていた。新たな密偵を捕まえると、お気に入りの密偵に顔を見せて心当たりがないかを尋ねる。お気に入りの密偵は、「知らない」「わからない」と答えた。もつとも、「素直になるお薬」を使えば本人自ら素性をしゃべってしまうのだが。

エドアルドは、お気に入りの密偵を自分の囲い者として周知させようとしていた。そうして裏切りに仕立て上げ、自ら拾おうとしていたのだ。

カズルは、何やら考え込むように言った。

「小生の考えているとおりの者なら、歳は若いがかんりの手練だよ。暗殺、細作、密偵を一人でこなす兵だ。四年ぐらい前だったかね——カイナンの『強欲王』が何を考えたのか、エチルの『無敗王』の暗殺を命じた。あれは、それに選ばれた一人だ。もちろん暗殺は失敗。『無敗王』と対峙して生き残ったのは、二人だけだったそうだよ。なかなかの猛者だろう？ もう一人の生き残りは今、カイナンの裏組織のまとめ役になっていたかな？」

さすがにカズルは、裏世界の事情に詳しい。

四年前というと、エチルが急速に国土を広げた頃だ。エチルは戦争を仕掛けてきた隣国を次々と返り討ちにし、三つの国を併呑した。

カイナンとエチルの間には、オウミがある。隣国ではないものの、『強欲王』ゲインの目に『無敗王』トゥールは脅威として映ったのだろう。『無敗王』さえいなくなれば、三国を併呑した直後の不安定なエチルは分裂する——ゲインはそう踏んだに違いない。

狙いは悪くないが、トゥールは莫大な力を持つ王級「加護持ち」である。そう簡単に、始末できずもない。エドアルドが気に入っている密偵は、そのトゥールと対峙して生き残ったという。

「それは、すごいな」

マティサは、率直な感想を述べた。

エチルの密偵組織といえ、カインンの密偵組織に劣らず有名だ。情報の正確さもさることながら、護衛の方面でも優秀だと聞く。

生きて帰ったということは、エチルの密偵組織を完全に出し抜いたということでもある。追っ手もかかったらうに、それを振り切る腕があったということだ。

マティサは、思わず呟く。

「……逸材だな」

「ご存知のとおりカインンの密偵は名を持たないが、中には二つ名を与えられる猛者もいる。あれはその一人で、『早風』と呼ばれる男だよ」

カズルはそう締めくくった。

すると、エドアルドがにっこり笑って言う。

「いやあ、僕も初めて見ましたよ。人抱えて馬より速く走るとか、城壁飛び越えるとか。おそらく加護持ち。だとは思いますがねえ」

魔力を持つ人間、加護持ち。その魔力が肉体に宿れば常人離れた身体能力を発揮し、精神に宿れば魔法という不思議を操ることができる。

肉体に魔力を宿した者は、時に『キレた』と言われる暴走状態に陥ることがある。

この状態になると、通常の何倍もの力を振るい、破壊衝動に任せて暴れまわる。その後、力を使い果たして“活力切れ”になれば、魔力、体力が回復するまでは無力である。

加護が強ければ強いほど『キレ』やすい。

精神に魔力を宿す魔術師は、この状態になりにくいという。それは、その身に宿る魔力を魔法として消費できるからだと言われている。

かつて、マティサは『キレた』時に馬と併走し、素手で人体を具足ごと打ち貫いたそう。もつとも当人は、おぼろげにしか覚えていないのだが。

マティサは、考え込むようにして言った。

「その密偵……間違はなく、加護持ち。だろう。うちに欲しいが……何をした？」

「追い込みを。帰るところがなくなれば、僕のところに来てくれるかな」と思っ

満面の笑みを浮かべるエドアルドを眺め、カズルが片頬を引きつらせた。

「ふむ、何やら気の毒になってきたね、卿に気に入られるというのは」

「ひどいなあ」

「皮肉なことですな。今のダイテスの牢には、優秀な密偵が山ほどいるわけですか」

コシスが溜息をついた。

エドアルドは気に留めた様子もなく、続ける。

「そうですね。だから主を持たない流しの密偵に、うちで働かないか声をかけてるところです。

あ、エチルの密偵は駄目ですねえ。無敗王への忠誠心が強すぎて、どう考えても寝返りません」

「まあ、小生のような流しは金次第ですから。もつとも、そういう輩はあてにもならんでしようがね」

そんな男たちのやり取りを、ミリアーナはにこしながら眺めていた。

カズルはふとミリアーナに目を向けた。

「もしや、ミリアーナ・ダイテス殿か？」

「そうよ。はじめまして、渋いおじ様」

「ふむ」

カズルはミリアーナをじっくり眺めたあと、首をかしげた。

「気をつけられたほうがよろしかろう」

「何に？」

「小生はランカナに雇われてダイテスを探っていたのだがね。特にマティサ殿の細君について調べよう、依頼されていたのだよ」

「あら、私？」

カズルの言葉に、ミリアーナは笑った。

「いやだわ、女は秘密がいっぱいなのよ。何を知りたいのかしら？ 恥ずかしいわ」

いたずらっぽく言うミリアーナだが、マティサとコシスは生きた心地がしなかった。

ミリアーナ・ダイテスは、『行くこともできない遠い異国』の知識をもとに、ダイテスに産業革命、技術革新を起こした人物だ。いわばダイテスの心臓である。

その事実は、ほんの一握りの人間しか知らない。ダイテス独自の技術とともに、発案者であるミリアーナの存在が知られれば、他国は放っておかないだろう。彼女自身が、超特大の火種なのだ。

それらを秘匿している以上、注目されるとすれば、辺境の地に婿としてやってきたマティサだけ

のはずだ。どういった理由で、ミリアーナ・ダイテスを調べようとしているのか。対外的には、マティサの妻であること以外に価値はないというのに。

ミリアーナについての詳細が他国に知られるのは、恐ろしく都合が悪い。……いろいろな意味で。マティサとコシスの心配をよそに、ミリアーナの調子はいつもと変わらない。そんな彼女に興味をそそられたのか、カズルが面白そうに尋ねる。

「さて？ 何を知ったかったのやら……。それで、あなたは何を隠しておいでかな？」

「とりあえず、執筆中の小説とか、その他諸々♪」

ミリアーナは、腐女子であった。彼女の書く小説とは、男同士の恋愛について綴ったボーイズ・ラブ——すなわちBL物である。

そもそもミリアーナがダイテスを豊かにしようとしたのは、日本のBL文化をこの世界に広めたいという思惑があったからだ。

識字率が上がり、平民が余暇を持てるほど豊かにならなければ、読書を楽しむという文化は根付かない。

BLを原動力に、飛躍的な発展を見せるダイテス。

その事実は永遠の謎にしておきたい。マティサたちは切にそう願っていた。後世に語り継がれたら恥ずかしい。それはもう、いろいろと。

カズルはミリアーナに尋ねた。

「しょうせつとは、なんですか？」



『亡国のカズル』だと!?』

早風がダイテスで知りえた情報を伝えると、カイナンの密偵たちはおののいた。

セタの城から逃亡した早風は、翌日、ダイテスの隣の領地にあるカイナンの密偵の拠点にたどり着いた。呪式によりオウミから出られない早風は、知り得た情報のすべてを組織に渡すため、拠点にいる密偵たちと向かい合っている。

「たぶん。人相や特徴からすれば」

「あやつまで無傷で捕えるとは……恐ろしいな、ダイテス」

壮年の男が唸った。

「それに、『火勢のヒスゲ』……このところ話を聞かないと思っていたら、死んでいたとは……」

今度は、中年の男が天を仰ぐ。

ダイテス領セタの城についての噂はじわじわと広まり、今や「密偵殺し」とまで言われていた。

触れただけで意識を失ってしまう罨など、これまでになかった。それも、魔法ではないという。この罨こそ、密偵たちがあつさりと捕まる理由だ。

早風は、ダイテスで捕えられた密偵の第一号である。その後も多くの密偵がセタの城に忍び込ん

だが、最初の頃は罨により命を落とす者も少なくなかった。罨に触れて失神し、高所から転落してしまった者——あるいは、罨の衝撃で口内に仕込んだ自害用の毒を嚙んでしまった者——

セタで密偵が捕まるたびに面通しをさせられた早風は、捕まった密偵の顔と、不慮の事態で死亡した密偵の数をよく覚えていた。

ダイテス側に殺すつもりはなかったのだろうが、あの罨はさすがすぎる。

それだけでなく、わずかながらもダイテスの実情に触れた早風には、とある予感があった。

「……勘ですけどね、ダイテスがその気になったら、カイナンをも凌ぐかもしれないっす」

「何、陛下が後れを取ると!?」

「陛下が、じゃないっすよ。カイナンという国自体、ダイテスに劣るかもしれないっす」

早風がそう言うと、さすがに全員が憤慨した。カイナンは大国である。小国並みの広さを誇るとはいえ、たかが一領地のダイテスに劣ると言われては怒って当然だろう。

だが、なんと言われようとダイテスにかかわるのは賢明ではない。早風は、そう判断していた。

「この情報、本国に伝えてほしいっす。俺はたぶん、逃げ切れないんで。この根城は、捨てたほうがいい。いや、ダイテスに捕まった密偵が知るオウミ国内の根城は、全部——」

早風がそこまで口にした時、見張り役の密偵が駆け込んできた。

「兵士が来た! 手入れだ!」

その場にいた全員が、顔色を変える。

「早風! 貴様やはり——!」

次の瞬間、部屋の扉が轟音とともに吹き飛んだ。木っ端微塵とは、このことを言うのだろうか。部屋に押し入ってきたのは、ダイテスの兵士たちだった。彼らは少量の火薬を使用して扉を破壊したので。

全員がとつさに逃走しようとし——呪式が発動した早風は、糸が切れた人形のように倒れた。(ちくしょう！ 嵌められた！)

早風にはどうしようもなかった。身動きひとつできないのだ。

床に倒れ込む際、早風の目には、こちらに向かつて何かをかざしている兵士の姿が映った。あれが呪式を発動させる鍵となったのだろう。

そうして早風は捕えられた。

だが、他の密偵たちは見逃されるだろう。意図的に逃がされるのだ——早風の生存と裏切りを広めるために。



マティサたちがカズルと面会した二日後、エドアルドから新たな人材を確保したという報告があった。マティサは、すぐにエドアルドたちを執務室に通した。もちろん、ミリアーナとコシスも同席している。

引き合わされた男は、まだ若かった。二十代の半ば程度にしか見えない。

カズルの話によると、かなりの猛者^{もさま}のはず。しかし、跪^{ひざまず}く青年からそれといった空気は感じられない。

背が高く、体は引き締まっている。全体のバランスからすると、少し手足が長いだろうか。

髪と瞳の色は茶色。そして顔は——恐ろしいまでに普通だった。

人の顔には、何かしらの特徴というものがある。眉が濃い、薄い。あるいは唇が厚い、薄い、などといったように。しかしこの青年には、そういった特徴がいつさいなかった。

エドアルドは輝く笑顔で、マティサに言った。

「紹介します。このたび密偵の教官役として召し抱えました、セイ君です」

「早風ではなかったか？」

聞いていた名前とは違っていると、マティサが首をかしげる。

青年がぼそりと呟いた。

「それは二つ名で。本名じゃないんで」

その瞬間、マティサの隣に座っていたミリアーナは、くわっと目を見開いた。そして勢いよく立ち上がり叫ぶ。

「アニメ声！ しかも美形声！」

「……は？」

きよとんとする青年を横目に、エドアルドが嬉しそうに言う。

「いい声でしょ、だから『セイ』君」



その密偵の声は男にしては高く澄すんでおり、甘い響きを含んでいた。

「いるのね、本当にこんな声の人！」

「ミリアーナとエドアルドは、「きゃ〜」と盛り上がっている。

「……」

「……」

「……」

マティサ、コシス、密偵の三人は、話についていけず黙り込んだ。

実のところ、密偵は自身の声を嫌っていた。特徴のない顔は、密偵にはうってつけのものだし、ここまで声に特徴があつては、人の記憶に残りやすい。

密偵は小さく息を吐くと、ミリアーナの狂乱きやうらんは見なかつたことにして、頭を下げた。

「お初にお目にかかります、『戦神せんじんの寵児ちやうじ』マティサ殿。ご高名こうめいはかねがね。自分はカインンの密偵でしたが、このたび帰るところをなくしましたんで、今後はこちらでお世話になります。生憎あいにく、名乗る名がございません。ご存知のとおり、カインンの密偵は名前を持ちませんので」

カインンの密偵組織は、まだ小さな子供を攫さらうか攫さらうかして、手駒てこまとして育てる。その際、子供たちは符牒ふぢょうや番号を割り振られて呼ばれる。そうするうちに、彼らは本来の名前を忘れてしまう。

早風と呼ばれる青年も、親にもらった名前を忘れてしまった者の一人だ。

「名がないのは、不便だな」

マティサがそう言うと、すかさずエドアルドが口を開いた。

「だからセイ君」

「……じゃあ、それで」

密偵はぼそりと呟き、エドアルドの付けた名を受け入れた。

「いいの!？」

ミリアーナが驚くと、密偵——もといセイが投げやりに言った。

「もう、どうでもいいんで」

セイは、人間として大切な何かを失ったような、諦めの表情を浮かべていた。

マティサは、エドアルドに視線を移す。

「何をした？」

「ちよつと、いろいろ」

エドアルドがえへつと笑った。

すると、セイから殺気が放たれた。そして、恨めしげに手を震わせる——まるで、エドアルドの喉を締め上げてやりたいとばかりに。

マティサが再びセイを見やると、彼は溜息をついた。

「捕まっつといて無傷なもんで、組織から裏切り者と……」

「……なるほど」

ダイテスでは、「素直になるお薬」を使用して密偵から情報を引き出している。だが、普通は拷問によって情報を吐かされるものだ。まったくの無傷であるセイが、裏切りを疑われても仕方ない。

エドアルドは、セイが裏切り者だと思われる状況を故意に作り上げた。これにより、セイはカイナンの密偵組織から命を狙われてしまったらしい。

セイは、庇護を求めてダイテスの傘下に入ったようだ。

「厄介な事情、抱えてんすけど」

「かまわん。俺のせいでもあるからな」

捕まったセイをエドアルドに下げ渡したのは、マティサである。責任は取るべきだろう。

話がまとまったところで、エドアルドが口を開く。

「それでですね。彼らにもうちの装備を使ってもらうつもりなんですけど、慣れてもらうために、演習場に連れてついでいいですか？ 許可ください」

エドアルドが求めているのは、ダイテスの秘密を明かす許可だ。

「いいわよ」

ミリアーナは、あつさりと首を縦に振った。

それを見て、セイは不思議そうな表情を浮かべる。

この世界の女性は、通常なんの権限も持たない。しかし、ミリアーナは当たり前のような顔を許可を出した。そのことに驚いたのだろう。

「うちの装備は普通じゃないもの、早いほうがいいわ。それに、私たちじゃ気がつかないような使い道を発見してくれるかもしれないしね」

「了解です、お方様」

こうして早風のセイ、亡国のカズル兩名に、ダイテスの秘密を明かす許可が下りた。



エドアルドは許可をもらったその足で、セイを城の一室に連れていった。もう一人の教官役を紹介するためである。

「入るよ」

エドアルドが声をかけて扉を開けると、強烈な酒の匂いが漂^{たな}ってきた。

部屋にいたのは、亡国のカズルである。その整った顔には、赤みが差している。カズルはセイを見やり、杯^{おん}を掲^{たか}げた。

「よう、ご同輩^{どうはい}。一献^{いっけん}いかがかな？ この秘蔵^{ひざう}の酒らしいが、かなりいける」

セイは、カズルに杯を押し付けられた。中の酒からは、かなり強い匂いがする。

「卿^{けい}がここにいるということは、教官役を引き受けたのだろう？ ならば小生^{しょうせい}と卿は、同僚^{どうりょう}ということになるな。いや、卿には以前かばってもらったが、小生自身が台無しにしまってねえ。卿には申し訳ないことをした」

言っていることはまともなようだが、なんかグレている。

「くくくく、亡国のカズルが聞いて呆れる。小生など、くだらぬ塵芥^{ちりめくた}。この口がただ情報を垂^たれ流すのに、なんの疑問も持たなかった。生きておる価値もないわ。それで矜持^{きやうぢ}を抱くとは、笑止^{しょうぢ}

千^{せん}万^{ばん}」

カズルは、人として大切な何かを投げ捨てていた。

セイはエドアルドに半眼を向ける。

「何したんすか？」

さすがにエドアルドも苦笑した。

「いやあ、ほぼ無傷で捕まったことに、もともとヘコんでみたいで。さらに『素直になるお薬』使ったら、こんななんなっちゃってね〜」

「……」

セイはカズルに同情した。

金次第では寝返ることも多い流しの密偵の中で、亡国のカズルは律儀^{りつぎ}な男として知られていた。引き受けた仕事の最中は絶対に裏切らず、終わらせた仕事については決して口外しない。それが、「素直になるお薬」によって口を割らせられたのだ。

この薬は、効果が切れたあとにも記憶は残る。内情をべらべら暴露してしまった密偵たちは、自己嫌悪^{じごけんあく}で一気に落ち込むようだ。セイがその薬を使われたのは一回きりだが——その時のことは、生涯^{しょうがい}口にしたくない。

カズルは、「飲まずにやっつけられるか」とぼやいた。

「ツナガ君。今日は無理でしょうが、明日見せたいものがありますから、来てもらいますよ。酒、抜いといってくださいね〜」

「承知した……」

カズルは小さく咳くと、杯をおおった。

一方、セイは押し付けられた杯をどうするべきか悩んでいた。

「毒など入っておらんよ」

苦笑しながらそう言うカズルに、エドアルドも続ける。

「まあ、お近づきの印と思ってもらつとけば？」

「お相伴にあずかります」

セイは用心しながら、ゆっくりと杯に口を付けた。その途端、顔をしかめる。

「なんすか、これ。えらく強いっすね」

その酒は、ワインなどに比べてかなり酒精が強いようだ。味は悪くないが、飲みくたす際には喉が焼かれているように感じた。

「ブランドーという酒だそうだ。小生は気に入ったがね」

カズルが口にしたのは、セイの知らない酒の名だった。

「……そんなに飲んで、大丈夫っすか？」

部屋には、何本も酒瓶が転がっている。

カイン人には酒豪が多く、セイも何気にザルである。しかし、さすがにセイもそれだけ飲んだらつづれそうだ。

カズルはくいつと酒をあおり、あいた杯に酒を注ぐ。カズルが手にしていた酒瓶は空になった。

「これで最後だよ」

そう言って笑うカズルに付き合い、セイも杯を空にした。



翌日、セイとカズルは、エドアルドに連れられ演習場にやってきた。その道中、二人は何度も度肝を抜かれた。自動車に汽車、その他、想像したこともない数々の技術。そしてとどめが、火薬武器だ。

明かされたダイテスの秘密は、二人の想像のはるか上をいつていた。

「これが、これがダイテスか！ 小生は何と戦っていたというのだ！ 小生はなんと愚かな！ こんなでたらめなものに、敵うはずではないか！」

カズルは大笑しながら叫び、セイは頭を抱えた。

「とんでもないっすね」

「二人とも大丈夫？ けっこう衝撃だったみたいだけど」

事もなげに言うエドアルドに、セイは尋ねた。

「……これがダイテスの抱えていた秘密なんで？」

「そうだよ」

「……俺、ダイテスがその気になったらカイン人を凌ぐと言ったんすけど、訂正するっすよ」

セイは、ははつと乾いた笑いを漏らす。

「何？」

「ダイテスはその気になったら、大陸を統べられる」

セイは、かなり本気でそう思った。カインンどころではなく、どんな国もダイテスには敵わない。エドアルドがにこにここと笑って言った。

「それは無理だろうって」

「は？」

「僕もね、前に尋ねたことがあるんだ。これだけの戦力があるのなら、大陸の覇者になれるんじゃないかって」

これだけの戦力があれば、誰もが一度はそう思うだろう。

「そしたら、こう言われたよ。兵站の距離が伸びれば補給が追いつかなくなるし、何よりも兵がついてこない。一番の敵は、『郷愁』なんだってさ。遠い異国にいるよりも、愛する家族の許にいたいと思うのが人間だって」

戦の際、軍需品の供給、補充は常に必要となる。後方に位置し、連絡、運搬を任務とするのが兵站である。戦線と補給部隊の距離が離れば離れるほど、それは困難になる。

また、戦人がするものである。兵なくして戦争はできない。しかし、郷愁にかられた兵は役に立たない。

「たかが一国の人間が、大陸中の人間を抑え込むことなんて、できるはずないって」

エドアルドはくすくす笑いながら、説明を続ける。

兵士の数は有限だ。物資も、またしかり。

戦に勝てば、支配した国にも一定数の兵士を配さなければならない。そのため国を盗れば、戦線で戦う兵の数が減少する。戦えば戦うほど、勝てば勝つほどに兵が拡散し、軍は弱体化していくのだ。それを補うために兵を送り出したところで、今度は自国が手薄になる。支配した国から徴兵したとしても、にわか仕込みの兵士など役にも立たないし、あてにもできない。戦闘中、敵に呼応して反逆でもされたら、たまったものじゃない。

さらに支配した土地の発展も考えていかななくてはならない。これは、どう考えたって割に合わないだろう。

「世界征服なんか、世界の広さを知らない馬鹿の戯言なんだってさ」

支配階級が一度は夢見る大陸征服を、馬鹿の戯言と言って切り捨てるとは。しかし、その指摘は正しい。一国の抱える人材と物資では、到底不可能だ。

過去、大陸征服を試みた者がいなかったわけではないが——エドアルドが口にした問題に直面するほど、勝ち進んだ国はない。そのはるか手前で、敗北している。

カズルがうすく笑った。

「ほう、けだし名言ですな。どなたがそれを口になさったのやら」

カズルが言うと、エドアルドはあっさりと答えた。

「お方様だよ」

これにはセイも少し驚いたようで、わずかに目を見張っていた。カズルは、片頬を持ち上げて笑う。

「なるほど、なるほど。ダイテスが抱える一番の秘密は、彼の細君でありましたか」
納得したように頷くカズルに向かって、エドアルドは言った。
「お方はね、このダイテスの頭脳で心臓だよ」



セイとカズルの仕事は、密偵の教育である。だがその前に、ダイテス独自の道具を使えるようになる必要があった。当分の間は、それに時間を割かなければならない。

火薬武器を扱う演習場から帰ってきた翌日、エドアルド、セイ、カズルの三人は、密偵見習いの修業内容を決めることにした。とりあえず、当面は見習いたちに自習をしてもらうことにしたのだ。まずはセイが自習の案を出したのだが、それを見たカズルの顔が引きつった。

「セイ殿、これはちよつと無理ではないかね？」

「そうっすか？」

セイにしてみれば、普通にできることばかりだった。この程度は、基礎として身につけてもらいたいものである。しかし、カズルは首を横に振った。

「卿を基準にはいけないな。普通の者には無理だ。これだから『加護持ち』は」

そう言って、カズルはセイの出した案に修正を加えた。しかし――

「いや、それだって、普通の人間にはきつすぎるから」

エドアルドは、きっぱりと言いつつ放った。

優秀すぎる二人にとって、「普通」の基準は相当高いらしい。

結局、エドアルド監修のもとに修業内容が決まった。

その後、見習いたちに自習を押し付けると、セイとカズルは自分たちの修業に入った。ダイテス独自の様々な道具に精通するための訓練である。

バイクや無線など、ダイテスの装備には無茶苦茶なものが多い。

鉄で作られたバイクは馬よりも速く、長時間走り続けることができる。

無線を使用すれば、遠く離れた場所からでも話をすることができる。

数々の恐るべき道具を前に、カズルは額を押さえて溜息をついた。

「こんなものがあつたのでは、今までの苦勞はなんだつたのか、と嘆きたくなるね、小生は」

「同感っす」

オーバーテクノロジー。それは、できればいいと思うことが本当にできる、恐るべき技術だった。

とにかく、あるものは使ったほうがいい。二人は苦勞しつつも、装備を使いこなすために訓練を続けた。

第二章 企みは軍師の嗜み

ダイテスにおける密偵組織育成のめどは付いた。しかし使い物になるまで、まだ時間がかかるだろう。当分は、マティサの腹心であるコシス経由の情報が頼りだった。

マティサたちがダイテスに帰還して半月。美しい銀髪を持つその腹心が、ためらいがちに、ある報告をした。

「……ランカナが、ジュリアス王子に縁談を申し込んだそうです」

ランカナといえば、自前の密偵組織がありながら、亡国のカズルを雇ってミリアーナの身边を探らせようとした国である。そしてマティサは、ランカナに少々因縁があった。

執務室の机で、いつものようにだらしなく頬杖をついたマティサが尋ねる。

「誰をだ？」

「ダイアナ王女殿下で……」

しばらくの間、部屋は沈黙に包まれた。

「……節操がねえな。あれはジュリアスより年上だろう？」

マティサは呆れたように言った。

ダイアナはミリアーナと同じ十八歳で、ジュリアスより三つ年上になる。

「はい。今まで目も向けなかったくせに、王太子になった途端、嫁き遅れを押しつける気か、と王妃殿下はお怒りです。ランカナの使者は追いついたそうぞうで」

そこで、ミリアーナは首をかしげた。

「ねえ、ダイアナ王女って、確か——」

ミリアーナが言いかけると、コシスが慌てて弁明した。

「お方様！ お方様と出会われる前のことです！ 我が君は、その、確かに彼の方とは——」

「やっぱり、婿様の元婚約者よね？」

王族が婚約すれば、国の一大事として情報が飛び交う。ミリアーナも、ダイアナという名に聞き覚えがあった。

ミリアーナの問いかけに、マティサはあっさりと頷いた。

「そうだ」

「我が君！ いえ、お方様、我が君は彼の方とは何も——」

「なんでコシスが取り乱すのよ」

オウミの西南にあるランカナは海に面しており、良港を持つ。

かつてマティサは、ランカナの王女ダイアナと婚約していた。

それというのも、オウミには海がないからだ。オウミの南にはハヤサ、東南にはカイナンの属国ナグモ、そして西南にランカナがある。海は欲しいが、いずれも他国のものである。

オウミは争って奪うのではなく、友好国として付き合う道を選択した。それが、国益を考えた政

略結婚というわけである。

当時の判断としては正しかったのだろうが、情勢は変わった。もはやランカナには、それほどの価値がない。

ミリアーナは、ふと何かに気づいたような表情をした。

「あれ？ もしかして私、婿様を奪っちゃった？ 略奪婚？」

「いえ、彼の国は、我が君が廢嫡されたと同時に婚約の破棄を申し出てきましたので、そういうわけではございません」

先に見限ったのはランカナのほうだと、コシスが補足した。マティサも続ける。

「もともと海の国との縁が欲しかっただけだからな。今ならハヤサとの縁組を考えるべきだろうが、当時はモグワールだった。あんな腐った国よりはマシって程度の思惑だ。ハヤサと同盟を結んだ今、ランカナとの縁談など断ってもかまわんさ」

ハヤサの前身であるモグワールは、王族が己の享樂のみを求め、民を顧みなかった国である。そのため各豪族は王家をあてにせず、自分たちの身は自分で守るとばかりに、力を蓄えていた。

そんな中、モグワールは代替わりした途端に何をとち狂ったのか、王弟ナリスの妻——『ハヤサの鬼姫』ことオクタヴィアを謀殺。怒り狂った『虐殺人形』ナリスは、息子の『ハヤサの鬼』トウザとともに、妻の仇である親兄弟を皆殺しにした。そして、新たな国ハヤサを起こしたのだ。これは、今から四年前のことである。

その際オウミはハヤサに味方して同盟を結び、モグワールを見捨てた。それ以後、ハヤサとはう

まくやっている。

ハヤサができる二年前に、マティサはダイアナ王女と婚約した。しかし約六年もの間、成婚には至らなかつた。

とはいえマティサの廢嫡騒ぎがなければ、いざれ正式に結婚していただろう。

「婿様に未練があるんじゃないですか？ 私の身辺を探らせるなんて」

ミリアーナの言葉に、男たちは沈黙した。

確かに、ミリアーナの身辺を探らせる理由など、それ以外に思い当たらない。しかし、それはマティサへの未練ではないだろう。

「……国への未練だろうな。ランカナがオウミとの繋がり欲している、といったところか」

マティサがそう答えると、ミリアーナがすぐに続けた。

「それでも、婿様の元婚約者そのまま弟君に持つてくるのは、ないですね」

すると、今度はコシスが口を開く。

「王族直系の姫は、ダイアナ王女以外には十歳のへザー姫ぐらいです。傍系になりますと、もう少しありますが」

適任の者がいないということだ。

考え込むミリアーナに、マティサは笑みを向けた。

「妬いたか？」

そうやって、ミリアーナの黒髪に指を絡める。

「そういうふうに見えます?」

ミリアーナは黒い瞳に生き生きとした光を宿し、いたずらっぽく尋ねた。

「いや……つまらんな」

そんな彼女の反応に、マティサは口を尖らせる。

「だって婿様、未練の欠片かけらもないじゃないですか。婿様が未練たらたらなら、妬いたかもしれせんけど?」

首をかしげるミリアーナを見て、マティサは喉で笑った。

「未練なんざ欠片もねえよ。もっと強烈な女がいるからな」

「それって、私のことですか?」

「他に誰がいるよ。お前が面白すぎて、他に目がいかねえ」

途端とたんに、ミリアーナが赤面する。

「煽あおるなよ、手加減できなくなるぜ」

「婿様、えつちいです!」



一行がダイテスに帰ってから数十日が経ったが、カイナンからオウミへの大規模な侵攻は、いまだなかった。前回カイナンが戦いくさを仕掛けてきた時、マティサは奇策により、常識では考えられない

早さで戦場に駆け付けた。この『早駆はやかけ』が功を奏したのかもしれない。

「今のところ、東は落ち着いているな」

コシスから報告を受けて、マティサが呟つぶやいた。コシスは、戦とは別の情報を補足する。

「南も西も武力による侵攻は受けていませんが、王太子殿下への縁談がいくつも持ち込まれています」

ランカナのダイアナ王女を皮切りに、ジュリアスには多くの縁談が殺到していた。ジュリアスが第二王子だった頃には、見向きもしなかった国々からのものだ。

廃嫡はいちやくされたマティサは、エテルとの和議を成立させたり、カイナンの侵攻を食い止めたりと功績を立てたが、復権することはなかった。これにより、王太子はあくまでもジュリアスなのだ。他国は認識した。そのため、今さらながら、オウミの次期王妃の座を巡って争いが起きているのだ。

これには王妃が激怒げきどし、縁談を持ち込んだ多くの使者たちを追い返しているらしい。

「婆ばあもたまにはいいことをする」

感慨かんがい深げにマティサが言う。

「我が君……笑い事ではありません」

「笑ってねえぞ」

そんな二人のやり取りを聞きながら、ミリアーナは首をかしげた。

「婿様、ブラコン?」

その問いに、マティサは眉をひそめる。

「ぶらこんとはなんだ？」

「……仲のいい兄弟のことよ」

「仲は悪くねえが……本当にそれだけか？」

さすがにマティサは鋭い。

「それ以外に何かあると？」

「わからんが、胸騒ぎがする。本当にそれだけか？」

「気のせいよ」

ミリアーナは笑って誤魔化した。しかし、心の中ではしっかりとマティサの属性をひとつつけ加えた。

二人がそんなやり取りをしている横で、コシスは溜息をついた。

「王太子殿下も、いつかは花嫁を迎えねばなりませんのに」

マティサは苦笑しながら答える。

「今のところ申し込まれてるのは、中小の国からの縁談だ。国益にはなりにくい。断つてもかまわんものばかりだ。これがハヤサやカイナン、エチルなら考えなきゃならんがな」

「ハヤサには、未婚の姫君が二人おられます。エチルにはいません。カイナンには、王太子殿下と歳の合う未婚の姫君が三人はいたかと」

「おっさん、子沢山だな」

カイナンのゲイン王には、嫡子から庶子まで、本人が把握しきれないほど子供がいるらしい。

老若男女すべてを性愛の対象にするゲインだが、妊娠可能な女性の愛人だけで、いったい何人いるのか。『強欲王』の名は伊達ではない。おそらく、まだ子は増えるだろう。

政略結婚という手段を使うとなると、カイナンには山ほど駒がいることになる。

しかし現段階では、カイナンからそういった話はない。オウミとの友好は望んでいないという意思表示でもある。戦を仕掛けて叩きつぶそうとしている国に、娘は嫁がせられないのだろう。

「問題は、この小康状態がいつまで続くかよね？」

当たり前のように、ミリアーナが口を挟んだ。

「そうだな……」

今は息をひそめている諸国だが、このままずっとマティサの影に怯え続けることはないだろう。オウミの西は、エチルとの戦からまだ立ち直っていない。失った兵というのは、そうそう代わりのきくものではないのだ。東の領主たちのがんばりでオウミはなんとか持っているが——いつ本格的な侵攻が始まらないとも限らない。

カイナンが攻めてくるとすれば、東しかない。

北には竜骨と呼ばれる山脈がそびえ、南にはハヤサがある。もしカイナンが南からオウミに侵攻すれば、最悪オウミのマティサ、ハヤサのナリスとトウザという三人の王級“加護持ち”に挟み撃ちにされる。

「冬まで逃げ切れればな……」

「冬……ですか？」

ミリアーナが不思議そうに首をかしげる。

「冬に軍を動かす馬鹿はおらん」

マティサが断言すると、ミリアーナは頷いた。

「ああ、そうですね。冬だと寒いから暖を取る方法を考えないといけませんし、薪などの物資も余分に必要ですから。食べ物も少ないし。焦土作戦なんてやられた日には、立ち往生しますよね」

「焦土作戦？」

「敵軍の侵攻先になる自国領土をあらかじめ焼き払って、薪一本、麦一粒入手できないようにする作戦ですよ。家も畑も森もすべて焼き払っちゃうんで、回復には時間がかかるんですけどね。それを食らった敵軍は、大打撃でしょう？ ある程度の物資は、現地調達を前提にしています。ある意味、兵糧攻め的一种ですわ。これを冬にやられたら——あとはわかりますよね？」

「それはきついな」

マティサは眉を寄せ、とにかく冬まで逃げ切りたい、と繰り返した。

「カインと条約でも結べればいいんだが……」

仮に条約締結を持ちかけるだけでも、検討している間は戦を仕掛けてはこないだろう。連絡を取り合うだけで、月単位で時間が稼げる。

「エチルのトゥール陛下なら、頼めば正式な条約を結んでくれるのではないですか？ 西の諸国は、もともとエチルが鎮めているようなもの。不可侵条約を目に見える形にしてみらうだけです」

ミリアーナの提案に、マティサは溜息をついた。

「トゥール王ならな。問題は西より東だ。エチルと違って、カインはただでは動かん。なんらかの代償がある……」

マティサは、悔しそうに呻く。ここでの代償とは、土地の譲渡や貿易における優遇措置を指す。

しかし——

「今の俺には、なんの裁量もない。自由に動かせるのは、この身ぐらいだな」

「えっ！」

マティサの言葉に、ミリアーナは真っ赤になった。一方で、彼女の瞳は輝いている。

「嫁……何を考えている？」

「え？ 何も」

ミリアーナが不自然に視線をそらした。

カインのゲインがマティサに執着しているのは、周知の事実である。いくら若くて美しいといつても、マティサは敵国の将だというのに——隣国の王は、とにかく節操がない。

この世界では、衆道——男色がごく普通にある。多くの男は女の少ない戦場でこれを覚え、日常化するのだ。

マティサとて嗜まないわけではないが、相手は選ぶ。男でも女でも、気に入るかどうか。それこそ、マティサの唯一絶対の基準だった。

それでも必要とあらば、自身を餌にするのも厭わないが——

「あほう。寝たぐらいで条約を結ぶ王がどこにいる！ 条約が結べるなら、百回でも二百回でもや

らせてやらあ。王は目先の快楽より国益を優先する。何度足を開こうが無駄なこった」

「えっっ！ 本当につっ!? 百回かー!」

「嫁ええ！ 食いつくのはそこか!」

「ミリアーナは、腐女子だった。」

そんな中、コシスがめずらしく声を荒らげる。

「お方様！ 我が君がおっしやったように、それくらいで国というものは動きません！ もしそれで条約を結べるのなら、わたしが代わりに千回でも二千回でもいたします!」

コシスの剣幕に、マテイサは驚いた。

「何を怒っている?」

コシスの薄い水色の目がマテイサを睨む。

「我が君、わたしは我が君が好んでなさるなら、どなたを選び、誰と枕を交わそうが一向にかまいません。なれど、意に添わず身を投げ出すのは——ご自分を粗末になさるのは我慢できません！ それはわたしの気分が悪い!」

「……悪かった」

それは、かつて身分や立場を盾に夜伽を強要されていたコシスに、マテイサが言った言葉でもあった。

二人の様子をにこにこ見守っていたミリアーナが口を開いた。

「私がカードを切りましょうか?」

「カード?」

「土壤改良法なんてどうです?」

「何?」

マテイサは、眉を寄せる。ミリアーナは、カインンにいったい何を提供するというのか。

「カインンは土地が痩せていると聞きました。オウミに攻めてくるのは、少しでも豊かな土地が欲しいからなのだと。けれど、今ある土地を豊かにする方法があるなら?」

「技術の提供か……それは考えたこともなかったな」

「もちろん、農耕機は貸せませんから、人力でできる範囲内での技術です。それでも、農耕民族が長年かけて築き上げたものですよ。欲しくありませんか? 効果はダイテスで実証済みです!」

確かに、それは、喉から手が出るほど欲しい技術だろう。

この世界で土地を耕す時には、人力が頼りだ。せいぜい、家畜に犁を引かせる程度。しかし、ダイテスでは機械を使用して土地を耕す。

ダイテスにやってきたばかりの頃、マテイサとコシスは農耕機械なるものを初めて目にした。土を削る勢いで起こしていく様には、衝撃を受けた。機械が入りづらい箇所は人力で耕すそうだが、作業効率は格段に向上する。ミリアーナは農業専門の組織を作り、農民たちに農耕機を無料で貸し出している。これにより、農地が増やせたわけだ。

さらに、ダイテスでは土壤の改良も行われている。農耕機を貸し出せない以上、カインンと同じように作業効率の向上を図るのは難しいが、土壤改良の技術だけでも手に入れる価値は充分にある。